

し かんきょうもんだい たいせつ にほん しぜんかんきょう せいかつぶんか 知っておきたい環境問題 大切にしたい日本の自然環境と生活文化

わす 忘れかけている自然と共存する生き方

日本の自然の特徴
 「雨が多い気候」「国土の約7割が山」
 「山が樹木で覆われている」
 「木や草が表土流失や洪水を防いでいる」

「苔が育む命」
 苔が貯えた水分が種の発芽を助けます

「水と空気と微生物の関係」
 「多様な樹木が作る好循環」
 雨や陽の光を和らげ、樹下に種やかな環境をつくり、多様な生き物のすみかとなります。根が地中に伸び、水と空気の通り道ができます。

「落ち葉や腐食が多い土」
 土の中を水や空気が移動できることで、植物の根が良く育ち、樹木が健康な状態を保つ。

「清らかな湧水」
 沢井 岩清水(小澤湧造)

「動物の体内には細菌がいる」
 動物の腸の中にはたくさんの菌がすみ、食べた物を分解し、体に吸収できるかたちに変化させています。吸収されなかったものが排泄され、更に土や水の中の微生物のエサとなり分解され、土に還ります。

「日本人は縄文時代から1万年以上の間、水源や自然の恵みを大切にしながら生活してきた。」
 青梅市岩蔵地区の「大岩」
 古くから信仰され、縄文時代の住居跡も付近から見つかっています。

「身近な自然の変化を和歌や俳句に詠み共感する」
 「虫の音色に情緒を感じる」
 「自然を肌で感じる住まい」
 木と土の家・畳・縁側・障子
 そして縁側でお月見などして自然に親しんできました。

山が水を貯える
 雨が木や草や落ち葉などの上に降り、表土を流れず土の中深くまで浸透し、時間をかけてたくさんの水脈から川に合流していきま

す。雨が降らない日が続いても、川の流が保たれます。

「山から水が湧き出す谷津」
 永山丘陵

「ホタルの生育に適した環境」
 ホタルは羽化して成虫になると餌を捕らさず一週間ほどの間に交尾・産卵して一生を終えます。「小さくてはかなげな光(命)」に人は心を寄せてきました。

- 流れのゆるやかな小川
- 岸辺にやわらかい土がある
- 草むらや木陰が多い
- ホタルの幼虫の餌となるカワニナの餌(落ち葉や野菜屑など)が多い

【ホタルの写真提供】井上 務氏

ごはんを食べるとき「いただきます」や「ごちそうさま」と自然の恵みに感謝する

「日本の気候風土に適した作物」
 ・お米・大豆・そば・大根・お茶
 農地の約半分は主に火山灰と腐植からなる「黒ボク土」で、肥沃ではないがそばやお茶に適している。大根は雨の多い日本で肥大化した。

「伝統的な和食」
 酵素や食物繊維を多く取り入れ、腸内環境を改善し免疫力を高める。

「発酵食品」
 (食物を菌が分解し人の体に吸収されやすくなる)

- ・みそ 米や麦を分解する麹菌などを利用
- ・納豆 穀物の茎を分解する枯草菌を利用
- ・漬物 野菜に付いている乳酸菌を利用

山に降った雨水が地中を通る間に浄化されおいしい湧き水となります。

石灰岩(建物や道路をつくるコンクリートなどの原料)
 大昔のサンゴや貝が蓄積し、地殻変動によって内陸部に残されたものと考えられています。

石炭
 大昔の植物が枯死した後、湿地や湖底などの酸素が薄く菌類に分解されない状態で残り、地殻変動などで高い圧力を受けて固まったものと考えられています。

「人が入ることで維持される里山の自然」
 雨水を貯え、水生昆虫・カエル、またそれを餌とする野鳥など、生物多様性を保つ役割を果たしてきました。

「樹木の間伐と草刈りでカタクリ群生地を維持しています」
 今寺天皇塚水田

「水田が守りはぐくむ環境」
 雨水を貯え、水生昆虫・カエル、またそれを餌とする野鳥など、生物多様性を保つ役割を果たしてきました。

お米由来の麹菌は日本の「国産」です。
 【写真提供】青梅の地域情報サイト OMEGACOTTI

「海の生き物は川によって運ばれる陸の栄養に支えられている」
 生き物に必要な塩分・鉄分などのミネラルは川から運ばれてくる

「生の魚や海藻を食べる」
 おさしみ・海苔・ワカメ・昆布・ヒジキ・寒天

「海の生き物は川によって運ばれる陸の栄養に支えられている」
 生き物に必要な塩分・鉄分などのミネラルは川から運ばれてくる

「東京炭鉱跡地の現状」
 「東京炭鉱跡地の現状」
 作業跡地には昭和50年頃まで管理事務所が残っていましたが、今は新しい住宅と広い草地が広がっています。南側に黒沢川が流れ、川を渡った所に採掘するための深さ20m程の穴が残っています。これを20m位まで掘り下げ、図のように南西方向へ山裾を水平に総長500m掘り進めています。当時の鉱区は約300m x 200mの広大な面積がありました。

※危ないの、立ち入らないうでください。

採掘した埋炭、泥炭の搬出方法
 採掘坑内にレールを敷いて、台車に乗せて採掘用の穴の深いところまで運び、エレベータのように巻き上げて地上に搬出しました。その後、ワイヤーを使って低地に下ろし、そこにある作業場で天日乾燥をした後粉砕し、袋詰めしたものをトラックで販売先へ運搬していました。

稼働時の概要
 ○地質 鉱床・秩父系正片層に介在の低炭層500カロリー以下の木質炭成および泥炭層
 ○鉱量 24万トン埋蔵と予測
 ○月産採炭 昭和30年頃350〜400トン
 ※昭和31年の採掘権者(大和炭業株式会社)発行の概要書による。

昭和35年に閉山された「東京炭鉱」
 海外から石炭石油が安く大量に輸入されたことや、化学肥料が普及したことで、需要が減少し閉山となりました。

炭鉱跡地は「どこ」にあるか
 会場の音でが最も知りたかった「どこ」です。場所は小曾木街道の「新岩蔵大橋信号」のすぐ近くです。「東京炭鉱」「東京炭坑前」のバス停留所が二つ並んでいます。

「東京炭鉱跡地の現状」
 「東京炭鉱跡地の現状」
 作業跡地には昭和50年頃まで管理事務所が残っていましたが、今は新しい住宅と広い草地が広がっています。南側に黒沢川が流れ、川を渡った所に採掘するための深さ20m程の穴が残っています。これを20m位まで掘り下げ、図のように南西方向へ山裾を水平に総長500m掘り進めています。当時の鉱区は約300m x 200mの広大な面積がありました。

※危ないの、立ち入らないうでください。

「東京炭鉱」を書くことになったきっかけ
 昭和48年、小曾木地域では青梅市立第七小学校の百周年記念事業として小曾木近代誌という歴史書を作ることとなり、川鍋さんが作成者の一人になりました。川鍋さんは子供のころから附近で炭鉱を見ながら育ちましたが、その当時の様子や閉山後の沿革を書いた歴史書が無かったため、本を執筆することにしました。本を書くための資料を探し、炭鉱跡地に残っていた管理事務所に行ったところ、当時の職員の方が住まれ、資料を一人で保管されておりました。川鍋さんがその方に資料がほしいと熱心に交渉したところ、その熱意に動かされ、在庫資料をいただけることになり、炭鉱を三すず唯一の記録を手に入れることができました。

坑内外連絡図 縮尺1:5000

「東京炭鉱」を書くことになったきっかけ
 昭和48年、小曾木地域では青梅市立第七小学校の百周年記念事業として小曾木近代誌という歴史書を作ることとなり、川鍋さんが作成者の一人になりました。川鍋さんは子供のころから附近で炭鉱を見ながら育ちましたが、その当時の様子や閉山後の沿革を書いた歴史書が無かったため、本を執筆することにしました。本を書くための資料を探し、炭鉱跡地に残っていた管理事務所に行ったところ、当時の職員の方が住まれ、資料を一人で保管されておりました。川鍋さんがその方に資料がほしいと熱心に交渉したところ、その熱意に動かされ、在庫資料をいただけることになり、炭鉱を三すず唯一の記録を手に入れることができました。

坑内外連絡図 縮尺1:5000

おうめ環境フェスタ2024基調講演
「東京で唯一の炭鉱!」
が青梅にあったお話!

11月24日 講演内容より
 講師 川鍋 幸三郎氏
 (元文化財保護指導員)

炭鉱とは、地面の中や山の中から「石炭」を取り出す場所のことです。いろいろなものを動かすための燃料や、肥料を作るための材料として使われてきました。石炭の一種である「亜炭」や「泥炭」が採れる炭鉱が東京で唯一「青梅市」にあります。

市民対象に、青梅市小曾木のバス停名にある「東京炭鉱」をテーマとした講演会を行いました。広報おうめに掲載すると、約一週間という短い期間で定員に達し、申し込みが締め切りとなりました。講演会の参加者の中に、炭鉱稼働時に搬出トラックの上乗りをしたことがある人がいたため、当時のお話を聞くことができました。

講師の川鍋さんは、「東京炭鉱」の研究における第一人者で、「小曾木近代史」という本の中に地下資源「東京炭鉱」の著者でもあります。執筆当初は石炭を掘ることを「炭坑」という漢字で書いていましたが、日本で石炭が掘られなくなったため、現在は「炭鉱」という漢字が使用されています。